

異文化理解と異文化経験

— バングラデシュスタディーツアーの経験を通して —

呉大学看護学部

川口 恭子

論文要旨 今や日本人口の1割が毎年海外旅行に出かける時代であるが、日本という国または文化を一歩出たときに、どれだけの日本人が、異質な文化やそこに住む人々に関心を持ち理解を深めようとするかは大いに疑問である。相手や相手の文化に対する敬意や理解を深めることなしに、自国文化や自国の価値を唯一の価値とするような振る舞いをしたり、相手に強いたりすることが、外国の人々との関係において大きな溝や垣を作ってきたと言えよう。21世紀を迎え、この限りある地球上は政治、経済、資源、環境など様々な分野において、自分のことだけ考えて行動しては、破滅の道を歩むことが明らかになってきた。こういう時代において、自分とは異質な文化を受け入れ、共に地球の上に共存していく道を求めていくことが重要な課題であろう。そのためには、若い世代に異文化理解を深める教育機会を提供し、国境や文化を超えて地球の生きる道を模索できる人々の層を厚くしていく必要がある。異文化理解を深めるためにいろいろな方法があるが、そのひとつの有効な方法としてスタディーツアーという異文化イクスポージャー (exposure) があげられる。

キーワード：異文化理解，異文化経験，スタディーツアー

■ はじめに

「国際化」という言葉が叫ばれて久しいが、具体的にそれが何を意味し、何を指すものであるかよくわからないままに、国際化を進めなくては時流に乗り遅れる、というような風潮が一人歩きしているように思う。「国際」という言葉がひとつのファッションであるかのごとき時代である。実際問題において、確かに、自分さえ良ければ、自分の国だけ良ければでは済まされない、地球規模で様々な問題を考えざるを得ない時代を迎えているこの地球上で、どのように自分と異なる文化や異なる文化を持った人と関わっていくかということは、地球の死活問題にも関わる21世紀の大切な課題であろう。文化や国境を越えて、人類文化という視点から、いかに異質な互いが異質さを受容し合うことができ、理解を深めていくことができるかということを考えると、できるだけ若い時代から異文化経験を通しての異文化理解学習の機

会を持つことが大切ではないかと思う。そういう地道な努力を介してしか、真の国際化、国際理解ということは生まれてこないのではないかと考えるからである。2000年9月に実施されたバングラデシュ・スタディーツアーにおける経験を入れながら、異文化経験が異文化理解に果たす役割を考察してみたい。

■ 異文化理解

1. グローバル社会での異文化理解の大切さ

「日本という国は島国であり、ただでさえ地理的に異文化との交流が疎であったが、その上に長い年月、鎖国という極一部の例外を除いて国を閉ざすという経験をもっている。さらに、明治になり鎖国が解かれてからも国を挙げて、それまで閉ざされていた、進んだ西欧の文化を取り入れ吸収するという事に力が注がれてきた。戦前までは『国際化』するということが『脱亜』する事と同

かわぐち きょうこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

等にとらえられており、それ故にアジアの隣国を見下した傲慢な姿勢を持ち、侵略へとつながっていった歴史を経験することになった。¹⁾ そういう歴史的背景からも、異文化に対する理解を深め対等な関係を育てることや、国際協調に必要な様々な能力を国民性として育てることが遅れがちになったのではないだろうか。その上、戦後日本は確かに経済的に繁栄を享受するようになったが、「子どもたちは物質的な消費の豊かさと過剰な教育・管理・保護と引き替えに共存と自立の根を培ってくれる他者や世界や自然と豊かに直接的にかかわりあって生きる暮らしを奪われてしまった」²⁾。

現代は、多くの人が当たり前のように、簡単に海外に出かける時代である。ちなみに日本では人口の1割以上が毎年海外旅行に出かけている。それだけ、異文化に触れ、自国・自文化との接触から、葛藤と同時に異文化への理解の姿勢や、違いに対する洞察の深さが生まれてくるのではないかと期待するのだが、必ずしもそうとは限らないことが多い。海外旅行の多くの目的が、名所旧跡の見学や、買い物、娯楽、という相手の文化の表面的な部分に触れるに過ぎないということも一つの理由であろう。海外旅行で、若い女性たちが高級ブランド物を安く買える機会とばかりに、買い物に目の色を変えて買いあさる姿を目にしたり、同じ女性が、その国のささやかなものを買うのにも、どうせ騙すのだらうと言わんばかりに、その国の人でもやりかねるほどの値切り方をするのに接したりすると、異国に行っても、その国の文化や感情に配慮することのない日本人の姿がやはり奇異に見える。それはそれで一つの異文化体験であろうし、自分の人生に喜びを与えてくれる大切な機会であろうが、そこに、その国の人々と人間同士としての交流がある場合、その経験は格段違ったものになってくる。坂本らが述べているように「日本人にとって異文化との接触の機会は確実に増えているが、自己改革を迫られるほどの異文化との接触は少なく、異文化とのつきあいが進歩しているとは言えない」³⁾ 現状である。坂本らは更に「近い将来、物理的なボーダレス傾向は益々強まり、それに伴い異文化との接触の機会も増加する。しかし、その状況に追い付かない精神的なボーダレスがストレスをもたらしたり、誤解や対立、緊張などを招くこともありうる。」⁴⁾と危惧している。

「国際化」という言葉が何の違和感もなく巷にあふれている近頃の日本だが、大津は「若い世代

の意識には今なおエスノセントリック（自文化中心主義的）な傾向が強く見られる……例えば、発展途上国に対して『貧しい』『遅れている』『汚い』といったマイナスイメージのみでとらえ、人々の暮らしや文化についての理解が欠けているため、結局は『日本人に生まれてよかった』という意識を超えることが難しい」⁵⁾と述べている。しかし、これは若い人ばかりではないだろう。若い頃からの国際教育を意識した異文化教育の必要性の大きいところである。

また、一方、異文化教育とか、国際理解教育とかいうときに、外国語の習得と言うところばかり強調されることがあるが、言葉は確かに文化を象徴する大切なものであるが、単に語学が出来るから異文化理解が深まるとは云えず、外国語で何をコミュニケーションするのか、外国語を通して人とどう関わりを持つのが重要になってくる。

航空路の発達により、また、情報化の進化により、地球の上は行き来が自由にできるようになり、情報は簡単に国境を越えて隅々にまで飛び交い、自分の国のことだけでは済まされないことが多くなった。異なる国や文化に対する理解ある態度は、今後ますますグローバル化の進む世界で生きてゆく常識ともマナーとも言えよう。

ユネスコ（UNESCO; the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）は、1974年第18回総会において「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育、並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」という長い名前の勧告を採択した。そこには次のような指導原則が示されている⁶⁾。

- 1) 国際的側面と世界的視野に立つ教育
- 2) すべての民族、文化、文明、価値および生活様式に対する理解と尊重（多文化教育—男性と女性、若者と老人、障害者、人種、民族、宗教、社会経済的集団などについて、多種性の理解と受容）
- 3) 諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大してきていることの理解
- 4) 他の人々と交信する能力（特に情報発信能力）
- 5) 権利と共に相互に負うべき義務が、個人社会集団および国家にあることの認識
- 6) 国際的な連帯と協力についての理解
- 7) 一人ひとりが、自分の属する社会、国家および世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと

異文化理解というものは、前述したように必ずしも、外国語を習得すればついてくるものではなく、それが、世界平和への理解や努力に繋がっていくことが重要な点であろう。田中は、異文化理解教育というものは「外国語の能力だけにとどまらず、自分と異なる文化や容姿をもった人に対する思いやりと寛容さ、人権尊重意識、世界で通用するマナーやもてなしの技術、不快感や劣等感そして優越感を対象化した普遍的で平等な態度、異文化交流を楽しみたいという意欲、論理的で節度のある討論能力、更に自国文化を外国語で表現する力など多様なものを含んでいる。」⁷⁾と述べている。更に田中が「人間の価値判断や好き嫌いの感情は、幼少から漬け込まれてきた文化規範に規定されるのではないか⁸⁾と心理学者の指摘を引用しているように、国際理解とか異文化理解ということは出来るだけ早い時期から教育の中に取り込まれていく必要がある。近年積極的に異文化理解教育が取り入れられるようになり、幼稚園、小学校、中学校、高校とそれぞれの成長の度合いに応じて取り入れていくようなカリキュラムを組んでいる学校も少なくないが、更に、大学生や同年齢の青年にも機会のある限り、異文化理解のための教育的機会を提供していくことが切に望まれる。

2. カルチャーショックやエスノセントリズムに陥らないために

寺西は「異質な文化や人々との体験は、鏡に写し出される自己の姿をみるようなものであり、自己の文化特性を対象化し、写し出すことになる。その場合重要なことは、お互いの文化の違いに優劣をつけることではなく、その違いを味わい、楽しむゆとりが必要となる。」⁹⁾と、違いを違いとして認めながら、その上に立って人間として等しい関係を持てるようになることの大切さを説いている。そういう教育的努力が成長の段階と共に、家庭や学校でされてきた場合は、異文化と接触した場合に「カルチャーショック」(文化摩擦)という状態が悪化することはずいぶん少なくなるのではないかと考えられる。蔡は、カルチャーショックとは、端的に言えば、個人が自分の生まれ育った文化と異なる外国文化に接することによって受ける一種の心理的衝撃のこと、と定義している¹⁰⁾。カルチャーショックということばを普及させたオバークは、カルチャーショックによる一般的症状

(一連の症候群)として次のような症状を挙げている¹¹⁾。

- 1) 不慣れな文化的格差に慣れよう、従おうとする努力が招いた緊張感。
- 2) 本来自分が生きていた環境から根こそぎにされていると感ずる喪失感、また個人が親しんでいた仲間や仕事と同じく、食事、レクリエーション、文化的刺激、社会的地位などを奪われたという意識や感覚。
- 3) 新しい環境内にいる人たちの前で感じる拒絶されたという意識。
- 4) 価値観や自己アイデンティティの感覚をめぐる混乱。
- 5) 自文化、異文化との間にある差異に気づいた時の驚き、不快、不安、憤慨、嫌悪の感情。
- 6) 新しい環境のなかで必要な役割を適切に演ずることができず、上手く対応ができないために生じる無力感。

更にまた、蔡は、カルチャーショックとは「異文化という環境において起こった予想外の状況に対する不安あるいは、それを何とか受け止めようとするプレッシャーや、どのようにしてもそれに慣れないことから生じるフラストレーションなどの一連の適応ストレスという心理状態」¹²⁾と述べている。カルチャーショックは、上手く立ち直りの機会を得られない場合、自文化中心主義(エスノセントリズム ethnocentrism)に陥る危険もでてくる。カルチャーショックは程度の差はあれ、殆どの人が異文化に接した時に経験することであろう。しかし、それに際して、あまりにも備えがない場合、極端に相手を否定して、「自分が属している文化グループ(自国)の基準を用いて他の文化グループを評価し、自文化をトップに位置づけながら、すべての他の文化をより低いランクに位置づける」¹³⁾ことによって、自分のバランスをとろうとする場合もでてくるだろう。

日本では「在日」韓国・朝鮮人を含め、人口の1パーセントは在日外国人であると言われているが、自分が異国で異文化に接した時だけでなく、自国・自文化の中にある異文化に対しての理解や受容の能力を育てることも、異文化教育の大切な点であろう。

3. 異文化理解を深める効果的方法としての直接体験(スタディーツアー、ホームステイなど)

田中は、「異質体験」と言う彼独自の言葉を使っ

て「国際理解は、異なるものとの接触において生じる感情や判断を客観視することを根底におくべきだ」¹⁴⁾と主張している。更に、文化人類学者関本の言葉を引用して、「異文化の問題は理解の問題である以前に、まず好き嫌いの問題であり、心地よさ、心地悪さの問題」¹⁵⁾であるから、「心のなかに根ざすそうした不快感や劣等感・優越感などを払拭してしまうことは容易ではない」¹⁶⁾ことを認めている。しかしまた、だからこそ、異文化との直接的な出会いによって、そこに生じる自分自身との葛藤を通して人間的に成長してゆく機会になりうる可能性が秘められているとも言える。直接的な異文化経験を経ることにより「対人コミュニケーションの多様な方法を身につけ……異質なものに対する寛容な態度や状況の変化に応じて適切な価値基準で行動することのできる柔軟性、多様な価値観を理解し粘り強く話し合いを続けようとする態度、多様なものの考え方や生活習慣を持つ人々と共同作業をするときに必要なリーダーシップと協調性、そして自分の判断基準を常に対象化しながら相手の変化や成長を待つ忍耐力、さらに自分の長所と短所を自覚し自己成長する力など、多様な資質を獲得する」¹⁷⁾ことが可能になってくるのであろう。

異文化に直接接する経験は、日本に滞在する留学生やその他の外国人と接することでも得られるし、必ずしも海外に出て行かなければできないことではないが、こちらから出向いて行き異国に足をつけて得られる異文化経験は、よりインパクトが大きいと考えられる。特に、自分や自文化のアイデンティティの育つ、10代、20代の、若い世代が直接的な経験としての異文化経験を持つことは、その後の彼らの生き方や、グローバルなものを見方を育てることなどに、少なからぬ影響力をもつであろう。上述したような、意味深い異文化経験をj得る、1つのよい機会として、近年さまざまな形で企画されているスタディーツアーやホームステイは筆者の経験からも有意義であると思う。異文化におけるスタディーツアーやホームステイといっても、企画者や目的、方法によって異なるであろうが、多くの場合、理解を深めるために事前にある程度の準備学習をしてから相手の国に入り、見学や交流をはかり、相手の家庭の中に入れてもらって直接生活を通して文化に触れると言うようなプログラムが組まれている。わざわざ「開発教育スタディーツアー」と呼ぶこともあるように、

単なる海外旅行と大きく異なるのは、事前学習で相手の文化やスタディーツアーの目的・テーマの学習をしてから出かけること、そして、相手国の人たちとの交流の機会が多いということである。また、多くの場合、スタディーツアーには引率者や相手側の受け入れ責任者がおり、そういう人たちを通して、直接経験をしながら相手文化への入り方や、理解の仕方を学習していく機会が得られることも重要であろう。

4. バングラデシュ・スタディーツアーの経験から

2000年9月、JOCS（社団法人日本キリスト教海外医療協力会）が企画・募集したバングラデシュ・スタディーツアーに、筆者はリーダーとして参加した。JOCSは海外（主にアジア圏）に保健医療従事者を派遣している団体であり、日本ではNGO（非営利民間団体）の草分け的（1960年設立）存在である。著者は1983年から1996年までJOCSの海外派遣ワーカーとして所属し、10年近くの歳月をバングラデシュで過ごした経験を持っている。その間、主にバングラデシュ南部農村地帯で活動する現地NGO（Human Development Organization 略してHDO）で保健婦として活動した。

JOCSのスタディーツアーは将来の保健医療ワーカー育成の一環として始められ、海外保健医療協力を志す若者や関心の深い若者に、JOCS海外派遣ワーカーが働く地での経験を提供するという趣旨で行われてきた。更に、必ずしも海外保健医療協力を目指す人でなくても、海外でのJOCS海外派遣ワーカーの任地での経験を通して、国際理解—特に先進工業国ではなく発展途上国で—を深めることは意味があるという理解をするようになった。毎年、春と夏の2回実施されているスタディーツアーだが、2000年9月にはバングラデシュで実施されることになり、筆者の任地であったポリシャル県ゴルノディ町（首都ダッカからガンジス川を越えて約250km）におけるHDO活動の見学などを中心としてツアーが計画された。募集は、JOCSの会報などで公募されたが、今回は8名募集のところ10名を越える申し込みがあり、先着順で8名が参加者となった。内5名が看護学生（内2名が男子：内4名が呉大学看護学部）、3名が看護婦であった。今回は期せずして参加者全員が看護関係になった。年齢は10代1名、20代6名、30代1名であった。スタディーツアーに先駆け、

8月には1泊2日のオリエンテーション・セッションがもたれ、事前に与えられているそれぞれの課題（バングラデシュ国の歴史、政治、文化、保健状況など）を発表し合ったり、スタディーツアーを受け入れてくれる相手国協力団体の活動の説明や、具体的なツアーの内容、生活・文化に関わる説明・諸注意、簡単なベンガル語の会話や交流のためのベンガル語の歌などを学習した。この、オリエンテーションは必須で、これに参加できない人はツアーに参加できないことになっている。それほど、異文化に入っていく前の準備としての事前学習に重きをおいている。

オリエンテーションの事前学習は、前章で述べたようなカルチャーショックを緩和するための、異文化に入っていく準備柔軟体操のような大切な役割を果たすと同時に、ツアーの参加者同士と一緒に寝起きすることにより、ツアーグループとしての親しみを共有する機会にもなった。まずは、最も身近な異文化としてのツアー・メンバー同士の相互理解を深める第一ステップといえるものであった。

ツアーの日程は、行き帰りタイのバンコク2泊以外にバングラデシュで6泊、合計8泊9日というものであった。バングラデシュでは、首都ダッカから目的地までチャーターしたマイクロバスで、ガンジス川をフェリーボートで渡り、約7時間のタイムトラベルのような旅をした。フェリーの港などでマイクロバスが止まると、周囲にうごめくあまりの人の多さと喧騒、自分たちに集中する好奇心一杯の視線に、参加者たちはまるでサファリパークを車の中からみているような緊張の面持ちであった。生まれて初めて経験する光景に、まるで車の中の自分たちは日本にそのまま踏みとどまってしまうような感じさえあった。それが、待ち時間が長くなり、あまりの暑さに車の中にいる事が耐えられなくなり、おどおどしながらも思い切って車の外に出た途端に感じが変わった。人々は褐色の肌に大きな目でジロジロと寄って来て凝視し少々鬱陶しいが、そんなに怖いものではないと実感したようであった。幼児が母親のスカートをつかみながら、少しずつ新しい世界を冒険していくように、彼らは、次第に車から離れて物乞いや物売りや寄ってくる人に囲まれながら周囲を歩き回れるようになった。こういう経験は実際にそこにおいて、自分なりの葛藤を突き抜けていかないと得られないものであろう。参加者の1人は

「車の窓のところに物乞いの人が寄ってきてお金や食べ物を求められたり、たくさんの人にじろじろ見られたりしたことが衝撃的で心の整理がつかない状態だったが、いざ車を降りて人の中に出たら気持ちがいすっきりした。降りてしまえば怖いというものではなかったのだが、車から降りるという一線を越える勇気がなかなか出なかった。」とその時の思いをあとから語った。

5. スタディーツアー参加者の感想から

大学の教員という筆者の現在の職業から、日本の若者に接する機会が多いものの案外、外側からの彼ら像しかわからないのが現状である。そういう意味からも、今回若い人たちと異文化の中で行動を共にし得たことは、筆者にとっての異文化である日本の若者への理解を深めるよい機会ともなった。ツアーメンバーの感想を入れながら、彼らの異文化への入り方や異文化に対する反応について、その側面を記してみよう。

1) 衣に関して

バングラデシュはインド文化圏であるため、若い女性はサロワール・カミージ（略してサロワカ）というゆったりしたズボンと裾の長い上着の組み合わせを着、結婚した女性の多くはサリーを着る。男性は、オフィスで働く人や学生は西洋式のズボンとシャツだが、くつろいで家にいる時や、肉体労働者などはルンギーという腰巻スタイルである。バンジャビという伝統的な男性衣服の上下組み合わせもある。

一般に世界中どこに行っても女性たちはファッションに関心を示し、異文化ファッションを楽しむ場合も多いように思うが、今回の参加者も早速サロワカ・ファッションを満喫していた。日本では昨今特にエスニック・ファッションが流行していることも、異文化ファッションの垣を低くしているのかもしれない。参加者の1人は、「最初は、どうせ今回だけだからと、サロワカを1枚購入して着ていたが、帰国する時には、自然と、また来るならもう1枚くらい買っておこうかしら、と思うようになった」と衣服の文化と繋げて自分のバングラデシュへの愛着を述べていた。今回は男性が2名参加したが、その2人が揃って初日からルンギーをはき、よほど気に入ったのか、筆者が“家でくつろぐ時以外は普通事務所などではかないものなのよ”とやんわり言ったものの、それでも外をあちこちはいて歩き、「オフィスタイム、

ルンギー、ノーグッド」と受け入れ団体の人に笑いながら言われたりして、「衣の文化のルール」を実感する機会にもなったようである。自分でやってみて、それに気づく、という学習は異文化のただ中であってこそである。それにしても、抵抗なしにすぐに形からとけ込んでゆける若者のバイタリティと好奇心には頼もしいものを感じた。男女共に、衣服に関しての異文化は、抵抗感よりも楽しみながら入っていけるものようであった。異文化教育の中にこういった入りやすく、楽しめる題材を積極的に盛り込んでゆくことの意味を感じる経験であった。

2) 食に関して

バングラデシュは元インドの一部であり、1947年インドとの分離独立を経て東パキスタンとしての歴史を持ち、1971年にバングラデシュとして独立した国であるが、文化はインド文化の影響が大きい。食事は、殆どすべてというくらいスパイスの効いたカレー味である。日本のようにあらゆる国のあらゆる種類の料理を抵抗なく食べる文化とはかなり異なる。日本のそういった食に対する柔軟性がよい影響をしてか、ツアーメンバーの食事に対する抵抗は少なく、ベンガル語で“おいしい”の意味である“モジャ”を連発しつつ、もてなす側が喜んでくれるような食欲を示してくれた。また、箸やスプーン・フォークでなく、手指を使って直接食事をするという経験も大きかった。ある参加者は「手で食べながら自分の指が黄色くなっていくのを見て、きちんと手で食べているのだと実感した」と異文化に直接触れている実感を手で食べることで得ていた。手で食べることには抵抗感の強い人もあり、受け入れ側も、スプーンなどを用意してくれ、それを使う人もいたが、無理をしすぎずにそういった自分の文化でのちょっとした習慣をカルチャーショック軽減のために使うことも、他の部分での異文化抵抗を心理的に和らげる役にたってくれるだろう。年齢がいくほどに、自分の文化での習慣は根強くなるのは仕方がないことである。しかし、慣れると手で食べる方が格段カレーの味がおいしくなることも実際やってみないと味わえないことである。

3) 言葉・コミュニケーション

バングラデシュはベンガル語という言語を使用しているが、英国植民地であった経験が長く、小学校低学年から英語学習が入っている。癖のあるインド風英語であるが英語は日本よりは通じやす

い。高等教育を受けた人は英語を流暢に話し、都会の中流以上の家庭の子どもは幼稚園から私学で英語での教育を受けることが珍しくない。しかし、バングラデシュの成人識字率は38%という低さであるから、農村部の貧しい層は英語が通じるといっても限られた人になる。今回のスタディーツアー事前学習会では、ベンガル語の挨拶や簡単な日常会話・単語を、カタカナで書いたものを使って短時間だが学習をした。その単語帳を持ち歩いてカタカナを読みながら相手の言葉で一生懸命話そうとする参加者の積極性には、異文化を尊重しようとする姿が現れていた。全体で行動するときには、筆者や他の通訳を介して話をするが多かったが、ホームステイで2～3人ずつ別々の家に別れたときには、通訳もおらず自分たちだけで、英語でやるしかない状況になった。後で聞くと、「自分たちは苦勞して英語で話したのに通じなかったし、あちらの人も何語で話しているのかさっぱり分からなかった」と述べていたが、もしかすると、あちらも「日本人は英語で話しかけても通じなかったし、何を言っているのか分からなかった」と言っていたかもしれないと笑った。お互い英語国の者でない同士が、コミュニケーションの手段として英語を使い、その英語がお互いの国独特の“なまり”をもったものであったため、お互い何語で話されているのか分からなかったのかもしれない。しかし、言葉が通じなくても、何か一生懸命伝えよう、分かろうとしていたことはお互いに通じ合ったであろう。それにしても、英語ができれば、農村であっても英語で話のできる若い人がいるのもっと話ができただろうし、人前で一言挨拶をといわれるときも英語でできたらよかったのに、と現地語ができない場合の英語力の必要さしみじみ身にしみたようであった。ゲストとしてどこかへ行ったら、必ずと言っていいほど、突然人前で挨拶をしなくてはならない文化においては、ことばだけでなく、何を伝えようとするかの内容の問題でもあると感じたであろう。それは、異文化にさらされたときに気づかされる、日本語で考える能力と内容の問題でもあろう。それにしても、お互いに英語を介しての不十分なコミュニケーションで、しかも数日間の短い時間という限りの中で、双方共に愛着を覚え、心を打たれる経験ができることに筆者は驚きを覚えた。

会話としての言葉ではないのだが、事前オリエンテーションで何回か練習した、バングラデシュ

の歌でコミュニケーションを深めた人たちも何人かいた。「エイポツダ(バングラデシュの河を歌った歌で、多くの人が知っている)を歌いながら、みんながひとつになっているのを感じて、感動して涙がこぼれそうになった。…国境を越えてひとつになれたのはすごく嬉しかった。歌ってすごい!」と、相手の言葉と一緒に歌った一体感を表現した参加者もいた。

バングラデシュの文化では、歓迎には歌や踊りを披露してくれることが多い。ゴルノディを去る前夜のお別れ会では、あちらの子どもやおとながすばらしい歌や踊りを次々に披露してくれた。日本人参加者はあまり芸がなかったが、いくつかの歌を歌って喜んでもらった。歌や踊りなどのコミュニケーションが言葉を超えて、お互いを親密な思いにさせてくれることを実感する思い出深い経験であった。

4) 人間へのまなざし

バングラデシュの人々は伝統的に人をもてなすことに篤い文化をもっている。また、ゲストに対して本当に親切にしてくれるのには心打たれる。これは、長くそこで仕事をする場合は、少なからず事情が異なってくるのだが、今回、スタディーツアー参加者はゲストとしてバングラデシュの人々の温かいもてなしに触れ、今まで経験したことのないような感動を味わった。ツアーメンバーの殆どがその感想文の中に、バングラデシュの人々から頂いた優しさを実感を込めて書いている。以下に一部引用してみる。「ぬかるみの道に足をとられて泥だらけになる。……『わあっ!!』と困っていると、ある1人の女性が私を井戸まで連れていってくれ、とても丁寧に泥だらけの足を洗ってくれ、しかもタオルでふいてくれた。すごく嬉しかった。その女の人が私に花のつぼみで作った首飾りをくれた。それもすごく嬉しかった。」「竹の一本橋をわたるときは荷物を持ってくれ、ぬかるみのひどい道では親切に手を支えてくれたりした。」「座っていると誰かがうちわで扇いでくれた。『自分で扇ぐからいいよ』といっても扇ぎ続けてくれた。なんて優しいのだろうと感動した。」「今日も感じたことはバングラデシュの人の優しさだ。バングラデシュの人はちょっとしたことに敏感に気づいてくれる。バングラデシュの人は本当によく私たちのことを心配してくれていた。心から優しい人たちであると思った。もっと長くいたいと思った。」「このスタディーツアーでの私の

最大の収穫は、人間のあたたかさを目でみることでできたことである」「私たちを迎え、もてなしてくれる人々は本当に温かい人たちだった。物質的な豊かさと心の豊かさ、人としての豊かさについて考えさせられる私の生まれて初めてのホームステイだった。」「虫に刺され、人生において最大に痒くて辛かった時、教会の人が『だいじょうぶ調子悪い?来たときと顔が違う』と言ってくれた。他にも何人もの人に心配してもらった。『なんて心の温かいひとたちなのだ』と心の中で思った。」「電気のないこと、気温の高さ、トイレの怖さ、言葉の通じないもどかしさ、そんな中で迎え入れてくれる家族の暖かさ、どこへ行ってもきれいな花束や welcome tea を出してくれ、精一杯のおもてなしをしてくださる人々に hospitality ということについて学ばされ、考えさせられた。」「とにかく貧富の差が激しい国だと思った。でもいくら金銭的には貧しくても人間的にはみんな豊かな人たちだった。それにみんなとても陽気な人たちでいつも笑顔が絶えることがなかった。なにより私はあんなに優しく接してもらったのは初めての経験だった。先進国の日本であってもバングラデシュの人たちから学ぶことや見習うべきことが沢山あると思う。」「電気も水道も通っていなかったが、電気はなくても、ランプはあり、水道はなくても井戸はあり、生きていくのには問題なかった。トイレもあったし、テレビやラジオがなくても日本の家族とは違い、村一つが一家族みたくに見えた。日本の家族では会話のない家族もあるというのに、バングラデシュは、一つの村の人全員で生活している、そんな感じを受けた。」などである。

ことばや習慣の大きく異なる文化の中に緊張と共に放り出されて、彼らが得たものの大きさ、また、そのもてなしや相手の気持ちを素直に感動できる参加者たちの心の底にある豊かさに、筆者も感動する思いであった。彼らのその思いは、彼らを迎え、もてなしてくれた相手の人たちにもしっかり伝わったであろう。実際に相手の文化に飛び込んで、その人々に接することの意義を大いに感じた。異文化理解といっても、要は、異なる人と人のふれ合いから生まれる親近感や違和感や、心の中に大切にしたいちょっとしたうれしさから生まれ育ってくるものなのではないかと思わされた。

「最初の海外旅行がバングラデシュでよかった。バングラデシュを去る時には、本当に切ない気持

ちになった。もう今回会った人たちとは一生会えないかもしれない、そう思うと涙がとめどなく出てきた。」というのも、そういう触れ合いから生まれてきた素直な感情であろう。

5) 異質なものの許容性

今回のスタディーツアー参加者は、筆者が懸念したよりもずっとすんなりと、異質なものに入っていける柔軟性を持っていることに感心した。日頃ぬくぬくとした不足のない環境に育ってきている若い世代だが、バングラデシュの雨期の高温多湿の中で、エアコンはない、お湯は出ない、時に水も止まる、夜は停電する、ランプを使う、個室どころか何人もの人と同室する、テレビや携帯電話もコンピューターも、好きな音楽もない生活環境で、不適応というほどのトラブルも生じなかったのは驚きであった。彼ら自身も自分が経験したことのない環境への不安や恐れをもって出かけたのであるが、飛び込んでみたときに、水の中に体がふわっと楽に浮いたような、不安からの解放感を味わったのではないだろうか。参加者は「初めての海外旅行で、食事もトイレも日本とは違い、水だって飲んでおなかこわさないかと心配だったが、最初は戸惑ったものの1日経てば慣れたもの。ご飯は食べられるし、夜も眠れる、お腹はこわさないし、私もなかなか適応力があると感心した。」「バングラデシュへ向かう飛行機の中でかなり胸がどきどきした。お金や荷物を盗られるんじゃないか？何かに感染して病気になるんじゃないか？などいろいろ不安になってきた。(バングラデシュに着いて1日目の夜)バングラデシュってこんな国なんだあ自分が心配していたようなことは別になかったし、あんなに不安だった気持ちもうなくなっていた。」などと感想文の中で書いているが、出発前、心配と不安で一杯だった自分が、結構なんとか異質なものに入っていけるといふ自信が生まれてきたようだった。その体感は、今後も自分とは異質のものに入っていく勇氣と信頼を生みだしてくれるのではないかと筆者は想像する。

6) 自分の内外への気づき、将来への展望や課題

スタディーツアーでは、短い時間に密度の濃い異文化経験をしたが、参加者はどれだけ集団で行動したとしても、経験は一人一人固有のものである。今回のツアーの経験から将来看護師として、発展途上国で仕事をしたいと考え始めた人、バングラデシュで地域保健に携わる仕事をしたいと具

体的夢を持ち始めた人、バングラデシュをまた訪ねたいと希望する人、決して世界の標準でない日本の生活環境に自分が如何に慣れ親しんできたかに気づいた人、今まで気づけなかった自分の可能性を見いだしたり、反対に自分の狭き限界を感じ自分を内省する機会を持った人、様々な人がいた。そんな彼らの言葉の一部を引用してみたい。

「日ごろ当たり前のように送っていた生活がいかに贅沢なものか、『食べるものに不自由なく』

『勉強するのに不自由なく』『健康を維持するにも不自由なく』……バングラデシュにいたときより、日本に帰ってきてからとても考えさせられている。」

「バングラデシュの人々のたくましさから『勇氣』『感動』『力』をもらった。」

「今回バングラデシュに行って日本での自分の生活をとても考えさせられた。どの人も一生懸命働いていた。汗水たらして力車をこぐ人、重たい荷物を抱えて歩く人、少しでも買ってもらおうと、物を売りに来る子供たち、仕事がない人はできることをして、少しでもお金をもらおうと、布で私たちの車を拭いていた。皆、その日を生きるために一生懸命だった。日本では、住む家があり、一日三度食事をし、子供は学校に行き、ストレスは感じつつも働く場所がある、ということが当たり前ようになっており、私自身も今まで自分の生きてきた過程をあまり深く考えなかったが、バングラデシュでこのような人と出会い、世界規模で考えると今まで私が歩んできた道は、決して当たり前のことではないのだ、と思い至った」

「私は今回のツアーで自分の将来についての考えまでも変わった。私は今まで最先端の医療にしか興味がなかったが、このツアーを通して地道な保健活動にも興味がわいてきた。ひとつひとつは小さなことでも、その小さなことをこつこつと重ねていくと大きな力になるのだと実感できた。将来はバングラで仕事ができるように看護の勉強を頑張りたいと思う」

など、異文化に触れたことにより自分を掘り下げたり、広い視野で世界を感じる機会を得たのではないかと思われる声に多く触れることができた。

帰国後、疲れもあってか下痢や胃痛を起こして病院に行った参加者もあったが、そのことを周囲から「バングラデシュのようなへんな国に行くからだ…」と冗談半分に言われたことに対して、あ

る参加者は「行ってもない人に何が分かるのだ」と憤りを感じたことを感想に書いている。そして「バングラデシュはヘンな国でも何でもない。とてもいい国だ。私は後悔なんて全くしていない。なぜならばいくら体調が悪くなくても、私は、バングラデシュではそれ以上のことをしてもらったからだ。後悔どころかまた行きたい。」とその思いを述べている。

■ おわりに

政治経済文化などすべての面でますますグローバル化していくこの地球上に、宇宙船地球号の乗員として世界の平和を意図して、異質なものへの理解を深めていくことは、最早欠くことのできない必須条件になってきつつある。そのためには、若い時代から異文化理解のための様々な機会を通して、異質さとの葛藤を経験し、違いを認めながら相手と自分の対等な価値を認めていくことができるような教育が求められよう。「エゴイズムがあふれ、公共心を欠いたわい雑な社会」(産経新聞記事「身の毛のよだつ若者」平成12年10月16日)に生きる若者たちができるだけ早い時期に、他者と自分の関係をグローバルな共生という視点でとらえられる様な教育的機会を提供していくことに、日本や地球の未来がかかっていると言っても過言ではないだろう。地球規模で解決しなければならない課題は今後ますます増加するであろうが、そういう時代に、異なる文化をもつ者同士が協力してその課題に取り組んでゆくことが必須となろう。坂本らも「異文化との接触に基盤をおいた体験学習は、異なる文化背景を理解しようと努め、それ

と同時に自国を見つめることのできる資質を磨くための効果的な学習方法¹⁸⁾であると述べているが、直接的異文化経験とも言えるスタディーツアーやホームステイの経験は有効な方法だと言えよう。今夏バングラデシュで行われたスタディーツアーの経験からも、それを強く実感した。筆者は、その国で長年仕事をしてきた者として、バングラデシュという南西アジアに属する一つの国を通しての異文化経験の機会をできるだけ日本の若者に提供したいと考えている。彼らが、そこで生きる人々の実際の生活に接し、言葉も通じない中、それでも何とか相手を理解し、相手に理解してもらおうとする経験から、それを経験した者以外には計り知れないほどの人生の宝物を得たと信じている。しかし、それを、未来に向かってどう自分の人生に、また、世界に、地球に反映していくかは、彼ら一人ひとりに課された課題であろう。

イギリスでは「グローバルスタディーズ」(多文化が共存し、人々が依存しあうこの世界で、責任ある市民として生活するために必要な知識・態度・技術を身につけるための学習)と称して、グローバル教育と言う立場で、地球市民を育てるための開発教育カリキュラムや教材が開発されてきた¹⁹⁾。最後に、その活動の創始者の1人であるD.ヒックス氏の言葉を引用しておきたい。

「子どもたちは、21世紀という今日とは非常に異なる未来に生きなければならない。未来をきりひらいていく能力は、ある意味において、紛争、変化、開発、平和、正義といった現代の諸問題に関し、国家的、地域的視野だけではなく地球的視野に立てるかどうかにかかっている」²⁰⁾

引用文献

- 1) 開発推進セミナー編著：新しい開発教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場からー，古今書院，p.19，1995.
- 2) アザーハウス企画：過酷な世界の天使たち，同朋社，p.4，1999.
- 3) 坂本真理子，富田輝司：異文化との接触に基盤をおいた体験学習の効果，愛知県立看護大学，Vol.3，p.47，1997.
- 4) 同上書，p.47.
- 5) 開発推進セミナー編著：新しい開発教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場からー，古今書院，p.20，1995.
- 6) 水越敏行，田中博之編著：新しい国際理解教育を創造するー子供がひらく異文化コミュニケーション，ミネルヴァ書房，p.2，1995.
- 7) 同上書，p.7.

- 8) 同上書, p.7.
- 9) 同上書, p.32.
- 10) 同上書, p.42.
- 11) 同上書, p.42.
- 12) 同上書, p.45.
- 13) 同上書, p.47.
- 14) 同上書, p.66.
- 15) 同上書, p.66.
- 16) 同上書, p.66.
- 17) 同上書, p.67.
- 18) 坂本真理子, 富田輝司: 異文化との接触に基盤をおいた体験学習の効果, 愛知県立看護大学, Vol.3, p.53, 1997.
- 19) 開発推進セミナー編著: 新しい開発教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場からー, 古今書院, p.14, 1995.
- 20) 同上書, p.18.

参考文献

- 1) バングラデシュスタディーツアー感想文集, 2000. 10 JOCS.
- 2) 開発教育推進セミナー編著: 新しい開発教育のすすめ方ー地球市民を育てる現場から, 日本ユネスコ協会連盟, 1995.
- 3) 佐野正之他: 異文化理解のストラテジー, 大修館書店, 東京, 1995.
- 4) 西岡尚也: 開発教育のすすめー南北共生時代の国際理解教育ー, かもがわ出版, 京都, 1996.
- 5) 開発教育研究会編著: 新しい開発教育のすすめ方II, 難民, 古今書院刊, 京都, 2000.
- 6) 本名信行他: 異文化理解とコミュニケーション, ことばと文化, 三修社, 東京, 1994.
- 7) 田中治彦: 南北問題と開発教育, 亜紀書房, 東京, 1994.